

東奥日報

2019年(平成31年)1月17日木曜日(16)

白鳥と餌の海草どう変化

八工大、平内「守る会」と浅所海岸共同調査



浅所海岸のハクチョウとコアマモの調査に取り組む(左から)田中教授、小泉さん、佐藤さん

八戸工業大学環境科学科の学生が「平内町白鳥を守る会」と共同で、同町小湊・浅所海岸のハクチョウ群と餌になる海草コアマモの分布調査を、ドローンなどを活用して進めている。東京のNPO法人が公募した研究支援事業に採択され、クラウドファンディングなどを活用した研究費の助成が決まった。学生らは調査・研究を通じ、多くの渡り鳥がやってくる同海岸の干潟環境維持に役立ちたいと意気込んでいる。(若松清巳)

ドローン駆使しデータ収集

同町は浅所海岸の環境調査を進めており、本年度は八工大に委託した。同学科の田中義幸教授、田中研究室の学生・佐藤史幸さんと小泉遼岳さん、守る会は、経年変化把握には長期調査が必要と考え、NPO法人「バードリサーチ」の研究支援に応募。採択全10件のうち本県関係は1件のみだった。助成額は出資希望者の投票で、3月に決まる。同海岸はハクチョウ飛来地として国特別天然記念物に指定されているが、飛来数は減少傾向にあるとされ



今月10日にドローンで上空100mから撮影した浅所海岸の写真(一部)。大きめの白い点がハクチョウ(八工大提供)

る。調査は昨年10月に着手し、同海岸を上空約100mからドローンで撮影。コアマモ群生の位置や時期による繁茂の差、飛来したハクチョウの数や位置などを調査・分析している。佐藤さんによると、積雪が増すとハクチョウの数が増えること、10月上旬と比べ11月上旬は海中のコアマモが大きく減ったことなどがこれまでに判明。「ハクチョウは収穫後の水田で落ち穂を食べることがあり、田が雪で覆われると海岸に來る個体が増えるのでは。コアマモは捕食されて減るとみられるが、渡ってきたガンやカモも捕食していると考えられる」とした。調査は同研究室や守る会

が今後本格化させ、来年3月にはNPO法人への報告論文をまとめる予定。4年の佐藤さんは「卒業後も調査に携わる」、1年の小泉さんは「引き続きドローン操縦でデータ収集に力を入れる」という。田中教授は「同町の高い環境意識に学生が答えた形。地域に根差した大学として高い評価が得られた」と目を細めた。

※「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」